

「生きつづける」ために
小田実

「生きづづける」といふこと ● 小田実

筑摩書房

「生きつづける」ということ

同じ著者によって

★小説

明後日の手記（河出書房新社，1951），わが人生の時（河出書房新社，1956）
アメリカ（河出書房新社，1962），大地と星輝く天の子（講談社，1963），泥
の世界（河出書房新社，1965），現代史（上・下）（河出書房新社，1968）

★評論・旅行記

何でも見てやろう（河出書房新社，1961），日本を考える（河出書房新社，
1963），壁を破る（中央公論社，1964），日本の知識人（筑摩書房，1964），
戦後を拓く思想（講談社，1965），小田実の受験教育（河出書房新社，1966）
平和をつくる原理（講談社，1966），義務としての旅（岩波書店，1967），人
間・ある個人的考察（筑摩書房，1968），終結のなかの発端（河出書房新社，
1969），難死の思想（文芸春秋社，1969），人間のなかの歴史（講談社，
1969），原点からの旅（徳間書店，1969），何を私たちは始めているのか
（三一書房，1970）

★共著

世界カタコト辞典（文芸春秋新社，1965）

★対話集

問題のなかでしゃべる（講談社，1970），人間の原理を求めて（筑摩書房，
1971）

★著作集

小田実全仕事全11巻（河出書房新社，刊行中）

1972年1月20日 第1刷発行

1973年2月15日 第8刷発行

著者／小田実

発行者／井上達三

発行所／筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8

TEL東京291—7651 振替東京4123

印刷／厚徳社／製本／鈴木製本

装幀／中島かほる

© 1972 小田実 (分類) 1090 (製品) 84050 (出版社) 4604

もくじ

I 「生きつつける」ということ

「生きつつける」ということ

アイマイで微妙ではある、しかし、シンの通ったくいちがい
世直しの倫理と論理

さて、どうするか

小さなちがい

田舎の病院で

II 人間について

人間について

ふたたび、人間について

ひとりひとりから

「しごと」と「くらし」

「国家の顔」と「自前の顔」

Ⅲ ことばの問題

私がいて、ことばがあつて

日本語について

「イングリッシュ」と「イングラント」

ことばの問題

ヤジ馬のことば

つけたし五篇

私は暈の上で死にたい

彼の死の意味

とむらいのことば

私は苦しい

シュラ場のヤジ馬

あとがき

I

「生きつづける」ということ

「生きつづける」ということ

——一九七一年以後——

1

問題は「生きる」ということより「生きつづける」ということにあるのではないか、と思うことが多くなった。そこから、いろんなことがらについて考えなおしたほうがいいのではないか、それが、今、必要なことではないか。私の思いはそんなふうにつづく。

いつ、どこで、そうした思いにとりつかれるのかというと、たとえば、満員電車のなかで、精いっぱい足をひろげ、ふんぞり返り、座席の上のつかの間のわが世界を必死の形相で保持する、どこからどう見てもサラリーマンとしか見えない中年男の顔を見たときである。それも表情、身なり、身のこなし方から見て、彼はいずれは名の知れた企業の上であってそれ以上でもそれ以下でもないのだろう、年のころは、まず、四十五、六か、疲れてはいるが、顔色もまったくさえないが、それでいて、どこかに中年男の貫禄、一流企業の士のプライドもそこはかとなく彼の疲労の底にあって、彼はその必死に保持したつかの間のわが世界のまんなかでまず「日経」を読み、ついで、「夕刊フジ」、ついで、いささかいかわしい「週刊何トカ」に眼を通し、その何頁目かのスクランダル記

事に視線を走らせ、郊外の団地まで一時間半——団地で彼を待ち受けているのは、言わずと知れた奥さんであり、一人、二人、三人の子供、つまりは「家庭」というものであり、彼の顔を見ているうちにその家庭のありさままでが私の眼にありありと見えて来るのだが、ここでひとつ言っておかなければならないのは、家庭が家庭だけで単独に私の眼に見えて来たことはないという一事だろう。家庭はいつでも彼が勤める会社のイメージをとまなび、その二つがたがいに裏うちするものとして存在しているゆえに、私は、ますます、問題は「生きつづける」ということにあるのではないか、と考えているのにちがいない。ついで、世のもろもろについて、その認識から考えなおしたほうがいいのではないか。いや、それは、今、何よりも必要なことではないか。

もちろん、私のその思いには、彼が勤め、日夜働き「日夜」というのは、べつにことばのアヤではない。団地にいたところで、ほんとうは彼は会社にいるのである）、それゆえに彼がコジキにならないですんでいる、すくなくとも彼がそんなふうに感じている（これもまたほんとうのことを言う）、日本のサラリーマンである彼をかくも会社に忠実にあらしめているものは、会社をやめたら食えなくなる、一家ケン族こそってコジキになるというまことにあからさまな飢えへの恐怖ではないか）会社がベトナム特需、つまり、ベトナム人を殺すことでしたま金をかせぎ、公害をまき散らし、今また「三次防」とか「四次防」とかいうものにもぐり込むとしていた企業であるのかも知れない、いや、多かれ少なかれそうであろうという認識も入っているのだが、そうかと言って、この文章を書いている私が彼とまったく切れている、そんなふうなもろとはまったく無縁な人間だと涼しい顔をするつもりはないのである。第一、私は彼と同じ満員電車に乗っていて、私もすでに三十八歳という中年の年齢にさしかかって来ていて、すでにそこまで生きつづけていて、まず、

くたびれている。からだのあちこちに故障も出て来ている。それでどうにかこうにか席を見つけて人を押しのけながら坐ると、それは彼のすぐ横手で、コンチクショウ、とはじめは思ったりするが、なにしろ坐っていると楽である。気持ちよい。そのうち、彼がさっきからひそかに視線を走らせている「週刊何トカ」に何気ないふうに見分ける。私は私がそんなふうな存在であるゆえに、そのとき自分の顔が彼の顔とほとんど見分けのつかないほど似たものになって来ているのを知っているがゆえに、問題は「生きつづける」ことにあるのだと思う。個人的なことを言えば、私は会社員でないし、家庭ももたないが、それでいて、会社と家庭の混合イメージは私の顔からでも透けて見えているのにちがいがなくて、そこから、問題を考えなおしたほうがいいのではないか。

そんな混合イメージを私の眼に浮かび上らせ、そうしたこと考えさせる顔はほかにもいくつもあって、たとえば、元自衛官小西誠氏を告発し、どこからどう考えても正当とは思えない彼の行動を「犯罪」と決めつけた検察官（彼も中年男だった）もそうなら、おまえのデモ行進の隊列は五十センチ分はみ出している、法律違反で逮捕するぞ、と息まいた中年の機動隊の隊長殿の顔もそんなふうな顔であった。

私が、どうしてそんな顔にこだわるのかというと、ひとつには、その中年男たちの顔が、自分のしていることにさして正義も熱情も感じていないらしい顔であるからなのにかがいない。まずくたびれがめだって、顔色もさえず、見ているほうも憎しみよりもうらがなさがこみ上げて来る顔なのであるが、それだけなら、生きつづけるということはたいへんなことすな、とため息まじり、同情まじり、ついでのことに同じ顔の持主と化しているかも知れない私自身に対する自己レニンもこきまぜて言っておけばすむことだ。ただ、この顔にはそれだけですませられないところがある。

この顔で何とやら、ということばがあるが、まさに、このくたびれた、うらがなしい顔は、そのままでの顔で、人を罪におとし入れることも、人をジュラルミンの桶で殴りつけることも、公害などわが社の関知するところにあらずと言いきつたりすることも、それこそ何でもやってのけるのである。

そうだとすると、やはり、問題は「生きつづける」ことにあると、ことさらに「問題は……」に力を入れて言うほかはない。そして、ここでつけ加えておかなければならないといささか辛い気持ちで思うのは、この「問題は……」ということばのなかに「たいへんなことですな」という感慨もいぜんとして入っていないこともなくて、こんなけしからぬ連中は問題だからすぐ放り出してしまえ、という方向に私の心は動いて行かない。それはまことにやっかいしごくなことで、それだけいつそう私の心は重いのだが、ほんとうにそんなふうに放り出してしまうことでこの結着はつくものではないのである。第一、どこへ放り出せばよいのか。そして、その放り出してしまえという彼らのなかに、私自身、あるいは、この文章を読むあなた自身が入っていないという保証はどこにもないのだ。

これは、こわいことである。そんなふうには、このところ、しみじみ思う。若い人で、私がそのことばほどことがらの本質をつかみとっていることばはないと思ったことばを言った人がいた。その人はこれまでいろいろなことをして来ていて、「活動家」という名で呼ばれていい人だが、そうした経験が背後にあるせいなのだろう、このごろ、中年男を見ているとこわくなると言った。若い人だって同じやないか、と私はことばを返したくなるのだが、なるほど、テレビの画面などにさえない顔つきで出て来て、ボソリボソリ、自分の言うことを自分でもたいして信じていないような声と口調で、わが社は有毒な廃水を流したことはごさいません、問題の病気は農薬によるものですな、

などと主張する人間はたいていが中年男なのである。もちろん、これは、若い人間がまだそこに出て来るまでえらくないということであるかも知れないが。あるいは、まだそこまで生きつづけていないせいであるかも知れないが。――

たしかに、私自身までがこわくなる。たぶん、若い人間の場合よりもさらにこわくなる。それはひとつには、今さっきも述べたように私も中年男で彼と私のつながりのほうが若い人間と彼のがりより深いと私自身が感じるからなのだが、この年齢の問題にはもうひとつの側面があつて、それは世代のことだ。

子供のとき、いや、青年になつてからも、そんな顔なら、私はいくらも見えて来たような気がする。そのときにも私はこわさを感じていたのにちがいないが、この顔の持主たちは、どうせ、過去の遺物だ、自分たちの時代が来さえしたらと思つていたようなところがあつた。「過去の遺物」とはあらためて説明を要しないことがらであるにちがいないが、一言で言つてのければ、戦前派であり、旧憲法下で育つて来た人間たちのことだ。ところで、新憲法で育つて来た自分たちが中年男になつたところには、つまり、日本という社会を自分で動かす時代になれば、いくら何でもこんな顔をして人まえに現われて来ないだろう、自分でも信じていないこんなウソ八百をヌケヌケと言ひはしないだろう――私は、ひよつとしたら、そんなふうに思つていたのではないか。

さて、今、その時代になつた。

私は、佐藤栄作があんな顔でテレビに出て来てもまったくおどろかない。こわいとは思ふが、そのこわさにはおどろきはない。

ただ、その公害とわが社は関係がないと言いきる無名の初老の技師にはおどろく。無名の中年の

工員にはおどろく。無名の若いガードマンにはおどろく。そして、こわいと思う。それは、ひとつには、くり返して言うが、私自身をそこに投影して見るからである。彼らがそんなふうにして生きつづけていることの重みを、私自身の重みとしてからだの底に感じとるからである。

その重みにどのようにむきあうか。

2

「生きる」ということばには、これはもちろん私の勝手な解釈だが、どこかしら瞬間的なひびきがある。生のエネルギーの充実、放電、いや、爆発というようなものをそのことばは暗示するが、いずれにせよ、そこにあるのは一瞬の鋭い生のたかまりなのである。「生きつづける」はもつとぼんやりと時間の流れのなかにひろがっていて、「生きる」に比べればどうしようもなく散文的で、鋭さを欠いていて、たとえば、そこで暗示されているのは、くり返し、それもウンザリさせるくり返しなのだ。「(勝利の) 栄光に生きる」とは言えるが「(勝利の) 栄光に生きつづける」では、いかにもさまにならない。何やらモタモタとしている上にさもしくて、せっかくの栄光にべつとりとくらしの重みがつく。もっと端的に言うくと、胃袋——自分のそればかりではなく、それこそ一家ケン族の胃袋の重みがつく。あんだ、またどっかの講演会で稼いで。トシ子の幼稚園の入学金が要りますねん。これは栄光についてばかりでなく絶望についても言えることで、「(敗北の) 絶望に生きつづける」とは言うて言えないこともないが、それもまたいかにも中年男性的な絶望の仕方で、あるいは、絶望した若者が絶望のなかで生きつづけているうちにおなかも出て来てしまえば、頬もぷっくりふくらんで来たというわけなのだろうが、中年男の絶望というのは、すくなくとも詩的な主題ではな

い。たとえそれが詩になったところで、あんた、早いとこ、ゼツボウの詩な、もう二つか三つこしらえて、どこぞの雑誌へ送ってエな。もううちとこの米ビツカラですねん。

私があることを考えるようになったのは、もちろん、中年男になったからだだろうが、「ベ平連」(ベトナムに平和を！市民連合)というような運動を自分でやり出し、それこそそのなかで生きつづけて来たからでもあるのだろう。ほんとうのことを言うと、中年男になったというところからだけでは、この文章の最初のところから書きつらねて来たような考えに心を乱されずに、私はもう少しのん気にこの人生をそれこそ生きつづけていることができているような気がしてならない。

正直に言っておいたほうがよいと思うのだが、「ベ平連」を始めるとき、私はこれほどの長さ、運動がつづくとも、私自身がそのなかで生きつづけるとも考えていたわけではない。革命を一生の仕事として生きる職業的革命家や職業的平和運動家の場合なら、あるいは、はじめからそうした性質の運動なら、六年やそこらの年月の長さなどたいした長さでもないのにちがいないのだが、私は自分が職業的革命家だとも職業的平和運動家だとも思ったこともないし(第一、運動でメシを食っている人は「ベ平連」の運動のなかには誰ひとりいないのである)、「ベ平連」の運動自体、職業的革命家、職業的平和運動家を中心にいるという性質の運動ではないのだ(もし、そうなってしまえば、それは「ベ平連」とはまったくちがった何ものかの運動だろう)。ここで「ベ平連」のことをくどくど述べてるつもりはないので簡単に言うのにとどめておきたいが、「ベ平連」はあくまで運動の外でふつうにメシを食っているふつうの人間が寄り集まってつくっている運動で、しかも、それはベトナム戦争という具体的な当面の政治問題に結びついた運動なのである。いや、こんなふうにもっともらしく言うのはよそう。それは私にはふさわしくないあまりにももっともらしい

言い方で、ほんとうのことを言うと、私は六五年の春、「ベ平連」の運動を始めたとき、そのうち戦争は終るだろう、と漠然と考えていたのにちがいないのだ。

しかし、戦争はまだ終らず、そのうち、私は私で、そして「ベ平連」は「ベ平連」で、ずるずると深みに入って行ったという感じなのだが（無責任な言い方のようなが、これが実感なのだから仕方がない）、そのずるずるとした深みへの入り込み方がまったく状況に押し流されたためのものであったと言え、これもまたウソになるにちがいない。こちらが自発的、自覚的に状況を切り開いたということもあり、逆にその切り開かれた状況がこちらを押し来るといふこともあり、この何年間か、二つの相乗作用のなかで生きて来た。いや、生きつづけて来た。

たとえて言うなら、「ベ平連」は心とからだのすみずみまで自覚した、自発にみちあふれた行者、苦行者の集団の運動ではないにちがいない。インド共産党の先覚者たちがまず心をひかれたのはマルクス、レーニンとともに古代インドの修験者、行者たちであったということをご自分で読んで記憶があるが、前衛党にはまさしくそうしたところがあるのだろう。「ベ平連」は、あきらかにそうした前衛党ではなく、宗教の比喩をつづけて言えば、在家仏教の運動に似ているのかも知れない。昔、親鸞は彼自身のことを「僧にあらざ俗にあらざ」と言いきり、そこに彼の思想と行動のよりどころを求めたということだが、彼のひそみにならって言えば、「ベ平連」の場合、すくなくともその一員である私の場合、自分はどう考えても僧ではない。しかし、そうかと言って、「俗にあらざ」ではない。まさに、「俗にある」のである。

私はこのことばを卑下も逆の意味でのてらいもなく言いたいと思う。それは、ひとつには、私が、たとえば「世直し」というようなものでもしほんとうになされるとするならば、前衛党という行者

の集団によってではなく、「俗にある」人間たちの手によって行なわれるものである、逆に、そうした人間たちの手によって行なわれないような「世直し」は真にその名に値しないものであると考えているからである。私がここで「世直し」ということばを使って「革命」というふうなことばを使わないのは、人びと——「ベ平連」のデモ行進にやって来るような「俗にある」人間たちが求めているものが、「革命」ということばで言いあらわされるものであるよりは「世直し」ということばがぴったりする何ものであるからだ。ふつうの政治的意味では、後者は前者にふくみ込まれていよう。しかし、その人びとが考えるような（私自身もまぎれもなくそのひとりだ）「世直し」は、のちに述べるように生き方のありようの変革までもふくめたもので、それゆえにむしろ前者をそのなかにふくみ込むものであるにちがいない。

「俗にある」ということは、ことばをかえて言えば、「生きつつける」ということであるのだろう。「世直し」にそくして言えば、私がここで述べている「世直し」とは、「生きつつける」人間が求めるものとしての「世直し」だが、その場合、「世直し」の出発点となるのは、「世直し」「革命」のみごとなプログラム、あるいは、それを保証するイデオロギーではなくて、あくまで、私たちが生きつつけている、生きつつけようとしているという基本的な事実なのだ。もとよりこの「生きつつける」ということばは、たとえば、奴隸として生きるのではなくてひとりの人間として生きつつけるということを意味していて、そうした生き方を妨げるものに対してはその「生きつつける」現場でひとつひとつたつたか——大ざっぱに言って、私は、それが今私たちがすくなくともその芽を私たちのまわりに見出しつつある「世直し」のありようなのだと思う。

しかし、それにしても、この「世直し」を求める「生きつつける」と、最初に述べた中年男たち

の顔があらわす、くたびれた、そして、それなりに傲慢な「生きつづける」と、どこでどうつながり、また、どこでどう切れるのか。くり返して言うが、私自身、彼らの顔のなかにあきらかに私の顔の投影を認めていて、それゆえにこそ、この「生きつづける」ということが私のまえに大きく立ちはだかる。

そして、ほんとうのことを言うと、この問題は、どのような政治運動にあっても、そのまえに大きく立ちはだかる問題なのだが、たとえば、学生運動の場合、運動は若くて、どのようにしてもどこでくらしからかけ離れているところがあつて、あるいはまた、その成員が目まぐるしく変わるこゝとがあつて、「生きつづける」ということよりも「生きる」ということに根ざした運動であつたためだろう、「生きつづける」ということのもつ重みを十分に受けとめて来ていないように見える。現在の学生運動の沈滞のひとつの原因はまさにそこにあると私は考えるのだが、いぜんとして、その傾向はつづいている。他方、労働組合の運動はどんなふうなことになるのか。ひと言で言うなら、それは、「生きつづける」ことに運動の根をおきながら、「世直し」を求める「生きつづける」よりも、疲労と傲慢に同時にみちた中年男たちのあの顔つきに大きく傾斜した運動なのだろう。そして、運動自体が何よりも「生きつづける」ことを求めている、運動の顔つきもまた、いつのまにか、くたびれたものでありながらそれでいて傲慢にもなっていて、私は、ときとして、こわさを感じる。おそらく、「反戦青年委員会」を生み出した若い労働者たちが感じたことも、私と同じようなことだったのだろう。彼らは学生とちがつて、彼らは彼らなりに「生きつづける」ことをひきずって歩いていて、それを「世直し」に結びつけようとした。私はその努力を高く評価するのだが、情勢の悪化とともに、いつのまにか、彼らは「生きつづける」ことよりも「生きる」こと

に運動の根を移してしまった。私には、彼らの運動の停滞のひとつの原因は、その運動が「反戦中年委員会」をつくり、「反戦老年委員会」をつくる方向に伸びて行かなかった、そのところの努力が今ひとつ足りなかったことにあるように思われるのだが、その対象となる中年、老年の労働者は何よりも「生きつづける」存在としての人間なのだ。「反戦青年委員会」をつくり出した若い労働者にとって必要だったことは、そして、今もって、いや、今いっそう必要なことは、彼らの「生きつづける」ということの中身をきめこまかく、また、ねばり強くとらえることではないのか。彼らをどうしようもない存在として捨て去ることはきわめて容易だが、その行為は両刃のやいばで、自分自身も「生きつづける」存在である以上、そのことにおいて、彼らと微妙に分ちがたくつながつている以上、そのことにおいて、やがて、自分も年をとり、中年となり、老年となる以上、やがては自分自身も捨て去ることになる。

3

私がいつもふしぎに思うのは、いわば参加の視点から書かれた運動論はあまたあっても、参加の継続という視点から書かれた運動論がないことである。それは、たぶん、運動論というようなものは、運動の前衛とか中心にいる、奇妙なことばをあえて使って言えば、「えらい人」の視点から書かれている、いや、「えらい人」自身が書いているからなのだろう。ここで言う「えらい人」とは、世間的な意味での「えらい人」というのではなくて、たとえば、運動の前衛に立つほどの力量と識見と勇気と献身をもった人間というほどの意味だが、彼らにとって、参加の継続は、あまりにも自明なことであるのにちがいない。しかし、運動の中心ではなくてはし近くにいて、「えらい人」は